



Title	日本語の数量詞の基本特性と分類
Author(s)	段, 建秀
Citation	研究論集, 22, 15 (左) -25 (左)
Issue Date	2023-01-31
DOI	10.14943/rjgshhs.22.115
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/87858
Type	bulletin (article)
File Information	04_rjgshhs_22_p015-026_l.pdf



[Instructions for use](#)

日本語の数量詞の基本特性と分類

段 建 秀

要 旨

本稿では、日本語の数量詞の様々な形を網羅的に整理し、その基本特性と分類について考察する。近年の数量詞に関する研究では、主に「3人」「10枚」などのような「基数詞」+類別詞（助数詞）のようなものを扱うのが一般的で、「たくさん」「お（お）よそ10人」などのような概量的・概数的なものについての考察は少ない。本稿では日本語の数量詞の特性にかかわる全般的な整理とともに、「特定数量詞」と「不特定数量詞」に二別し、「不特定数量詞」を「語彙的比率数量詞」、「大まかな数量を表す数量詞」、「多寡を表す数量詞」という三つの下位分類を行った。また、数量詞の問題点という点、数量詞遊離構文に言及しなければならないため、数量詞が含まれた構文の意味特性を少し触れ、その結果、数量詞構文の意味を確定するために、文脈上の補足が必要であると主張する。

1. はじめに

数量詞 (quantifier) とは、一般的には類別詞 (助数詞) を伴い、事物や動作の量を表す表現であるとされている。例えば、「2杯」「6人」「10台」というようなものである。数量詞はこのようなもののほかに、「たくさん」「かなり」「すべて」「(お) およそ10人」などのように、事物の数量を明確に表すことができず、数量情報の表示が曖昧な数量詞もある。また、こちらの数量詞を観察してみると、その中身の種類や性質が異なっていると考えられる。

- (1) 裕子は北陸自動車道をかなり走り、休憩をとった。 (加藤 2003)
- (2) 太郎は10冊の文庫本をすべて読んだ。
- (3) 花子は昨日会った学生を数人招待した。

(1) の北陸自動車道は元々一定の距離を持っており、「かなり」は裕子の走った距離が長い

という判断・評価を含んでいる。(2)の「すべて」は指示された名詞句「文庫本」が「10冊」のような数量詞で限定されると、100%という比率的解釈になる。(3)の「おおよそ10人」は不明確な数量表現であるが、ある程度の幅を持っている。ここで示したように、数量詞には様々なものが見られ、その中身の性質も違うのである。本稿では、日本語の数量詞を概観し、その基本特性を検討しており、数量詞の分類を試みる。

2. 先行研究

2.1 先行研究

数量詞の定義や分類に関しては、これまで触れられた研究もある。ここでは、先行研究において数量詞がどのような扱いを受けてきたかについて触れておきたい。

奥津(1969:48)は「数量的表現(numerical)」を「数詞(numeral)」と「助数詞(classifier)」の組み合わせからなるとしている。加藤(2003)は「数量の定義」については「数量を表す語(句)と定義してもよいはずであるが(略)数量詞に関する先行研究は多いがその大半は数量詞に完全に定義を与えていない」としている。それに加え、奥津(1969)の定義には問題があることを指摘した。一つ目は類別詞が欠落することがあり、この場合は考えられていないという問題である。二つ目は、「たくさん」「かなり」のような類別詞(助数詞)を伴わない数量詞が念頭にないようであるという問題点である。また、加藤(2003)では、「3人」「5枚」のように、類別詞を伴っている数量詞を「特定数量詞」、それに対し、「かなり」「たくさん」のように、類別詞を伴っておらず、不特定の数量を表すものを「不特定数量詞」と呼ぶことにする。さらに、事物の存在数量を表す数量詞を「存在数量詞」とし、そうでないものを一括して「非存在数量詞」と名づけた。

赤楚(2005)では、「3人」「100枚」「4軒」「数匹」「4, 50冊」などのように数詞と分類詞(classifiers)が一体となったものを「数量詞」と呼んできたが、さらに、下位区分すると、具体的数量を基数数量詞(cardinal numeral quantifiers)と、数量が曖昧な概数数量詞(approximate numeral quantifiers)に分けられ、両者を区別する必要があることを記述的に説明した。それに加え、統語論的観点から両者の区別を分析した。概数数量詞は数量情報が基数数量詞に比べて低いと、形容詞的機能が弱まり、その分、先行詞との結びつきが弱められ、副詞的性質が帯びるという指摘をした。

田中(2011)は基数詞、概数詞、数量詞の個別の意味機能について論じており、数量詞の分類を行った。田中は、「3匹」を基数詞、「みんな」を「数量詞」、「数人」を「概数詞」と呼んでいる。しかし、「みんな」は母集合とする全体量が不明であれば、指示する数量情報が概数的であるため、「概数詞」にも当たると考える。

以上は、これまでの数量詞の分類を扱った研究をまとめてみたが、その大半は、具体的な分

類を提出しておらず、数量詞の各自の基本特性を詳しく明らかにされているとは言いにくい。本稿は、日本語の数量詞の全般を概観し、その基本特性をそれぞれ究明し、分類を試みる。

2.2 本稿の枠組み

先行研究において日本語の数量詞に関しては、「2杯」「6人」のように類別詞を伴ったものを「基数詞（赤楚）」、「基数数量詞（田中）」や「特定数量詞（加藤）」と、「かなり」「たくさん」のようなものを「概数数量詞（赤楚）」、「数量詞（田中）」や「不特定数量詞（加藤）」という2種類に大体分けている。田中は「みんな」を「数量詞」に分類したが、「みんな」は母集合の量が不明であれば、数量情報が曖昧であり、概数的数量詞の一種と見做されると考えられる。また、赤楚（2005）が「概数数量詞」という概念を提出したが、実はこのタイプの中に様々な種類の数量が混在しており、再分類する必要があると思われる。さて、加藤（2003）により、「たくさん」「かなり」「少し」といった典型的な不特定数量詞は、語彙群としてみた時、特定数量詞と異なり、統語的性質が均一ではないことを指摘した。本稿では、加藤（2003）の概念に従い、類別詞の随伴の有無により、数量詞を「特定数量詞」と「不特定数量詞」に二別し、不特定数量詞の下位分類を行ってみる。

3. 特定数量詞

数量詞は、一般的には類別詞（助数詞）を伴い、ものや動作の量を示す表現である。「2杯」「3人」の「杯」「人」のようなものは、ものの種類や数え方の意味を加える要素であり、これまで助数詞と呼ばれてきた。この種の要素は日本語以外の言語にも広く見られ、国文法では助数詞と呼ばれるが、現在では通言語学的な観点から類別詞（classifier）と呼ばれている。形態論の観点では、「接尾辞」ともみなされる。

(6) その店で私はみかんを20個買った。

(7) その店で私はみかんを20買った。

(8)???その店で私はみかんを3買った。

(加藤 2003)

ところが、日常の会話において、類別詞が脱落している数量表現の使用はあまり少なくない。以上の例文のように、同じ構文において「20」は適格で、「3」だと類別詞を伴わないと文が不自然になる。加藤（2003）では、この言語事実を指摘し、(7)が適切で、無標の解釈としては個数と考えられるが、無条件に「20個」の意であると確定できるわけではないとしている。

- (9) 3大学がイベントに参加した。
- (10) 国立大学3校がイベントに参加した。
- (11) #5会社が倒産された。
- (12) 5社が倒産された。
- (13) #近くに3公園がある。
- (14) 近くの公園には3箇所がある。

また、日本語の類別詞は「匹」「人」「冊」など自立性を持たない名詞のほか、「大学」「部屋」「部門」「会場」「駅」など自立性を持つ一般名詞が類別詞にも用いられる。(9)(10)のように、「3大学」を「3校」に言い換えることができる。一方で「会社」「公園」などは類別詞として一般的に使えないが、「5会社」を「5社」、「4公園」を「4箇所」に変更すれば使用できるようになる。そのため、類別詞として使えないものを決まっているようなほかの類別詞に変更すると適格になる。

日本語の数量詞に関する問題といえば、「数量詞遊離」という現象に触れなければならない。現在の数量詞の研究では、遊離関係(派生関係)を考えない立場をとることが一般的である。本稿でも、「数量詞遊離」という用語を用いるが、近年の関連文献に従い、派生関係を認めずにこの用語をそのままに用いることにする。数量詞構文において、数量詞が名詞を修飾する文を連体数量詞文としており、数量詞が副詞的成分として働き、述部を修飾する文を連用数量詞文(=遊離数量詞文)として捉える。数量詞遊離構文は今まで、奥津(1969)、井上(1977)、加藤(2003, 2006)などは、さまざまな形で検討されてきた。ここでは数量詞構文に少し触れたいと考える。

- (15) 3人の学生が来た。
- (16) 学生が3人来た。
- (17) 学生3人が来た。

(15)は連体数量詞文で、(16)は連用数量詞文である。加藤(2006)により、存在数量詞を表す連体数量詞では、一つのまとまりを成したものとみなす《集合的認知》がなされており、既定的単位として認識されていると主張した。いわゆる、(15)の「3人の学生」は集合的認知と見做され、(16)は連用数量詞文で、集合的認知が存在しないと考えられる。次は違う種類の例を取り上げてみる。

- (18) #3人の学生が増えた。
- (19) 学生が3人増えた。

「増える」「減る」のような動詞は、数量上の変化・増減を示すものである。(18)は文法的に非文ではないが、事象の描写にあたっては不自然である。(15)(16)(17)は認知上の考慮を入れないと、実質的に意味差が大きくなり、「学生」が3人来たという出来事を陳述することで、構文の情報がここで終わるのである。(19)のように「来た」を「増えた」に変更すると、構文の意味が変わった。元々は2人いることを仮説すれば、3人増えると、2人の状態から5人の状態になり、全部5人になると理解することができる。つまり、(19)の「3人」は「5人」と「2人」の間の「差」を表しているわけである。(19)の「3人」は「変化量」と解釈されると考える。

(20) 学生が5人に増える。

(21) *学生が5人に来る。

連用数量詞の後ろに「に」をつけると、変化の結果、いわゆる「達成量」とする解釈ができる。最初に2人の学生という状態から、最後の結果としてトータルで「5人」の状態になると言えるわけである。(21)は変化を表さない「来る」に変更すると、文が不適格になる。また、(20)(21)はいずれも、元々の学生の数量が明確でないと、構文の意味が確定しにくく、文脈上の補足が必要であると思われる。

連用数量詞文において、動詞の語彙的な意味により、連用数量詞が指し示す量の種類が違うのである。本節で変化を表す動詞の数量詞文を取り扱い、この場合の連用数量詞は動作の「差」と「達成量」を解釈とする。それに、数量詞構文の意味が確定するために、文脈上の補足が必要である場合がある。

4. 不特定数量詞

加藤(2003)では、不特定数量詞は、類別詞を伴っておらず、不特定の数量を表すものとされている。いわゆる、物事や動作の数や量をはっきりと表示しないものであり、数量情報が曖昧、不特定なものなので、実質的考えみると、「概数・概量」の表現と言えるだろう。

本稿では、不特定数量詞を形態と意味の観点から、大まかに分類を行い、それぞれの基本特性を見出す。まず、不特定数量詞には、「すべて」「半分」のように、母集合の全体的な量とその中の部分をその比として割合を表し、語彙的要素からなる比率を表すもの¹がある。また、特に多さを表す意味を含まず、数量を特定化しないで大まかな数量を表す不特定数

¹ 以降は「語彙的比率数量詞」と記する。

² 以降は「大まかな数量を表す数量詞」と記する。

量詞²もある。例えば、「いくつか」「何人か」「数個」「大およそ40枚」などである。これとは別に、数量の多寡を表すもの³をもう一つのタイプとして分類する。例えば、「たくさん」「かなり」「大量」「大勢」などがある。本節ではこの3つタイプの数量詞について検討していく。

- (22) 語彙的比率数量詞：「すべて」「全部」「半分」「ほとんど」…
- (23) 大まかな数量を表す数量詞：「いくつか」「何人か」「数個」「40枚ばかり」…
- (24) 多寡を表す数量詞：「たくさん」「かなり」「少ない」「少数」…

4.1 語彙的比率数量詞

このタイプの数量詞は、「全部」「すべて」「みんな」「全員、全校…」「半分」「半額、半数…」「大部分」「ほとんど」「一部」などがある。一般的に語彙的観点から見ると、母集合の存在（全体量）を前提とし、その指示された比率用法を獲得することができ、比率数量詞と見做せる。意味的には、ある対象の全体に対する割合を示すものである。とすれば、これは日本語の照応現象に当てると思われる。

これらの数量詞の中で、「すべて」「全部」「みんな」「全員、全校…」は、全体の量として指し示すという特異な性質を持っている。「半分」「半数、半額…」「二分の一」は、母集合の量が明示されると、その比率を表す具体的数値が計算できるようになる。「大部分」「ほとんど」「一部」は母集合の量が明確になっても比率数値がはっきり計算できないものである。

「すべて」「全部」「みんな」などの数量詞は、これまでの研究では「全称数量詞」として捉えられることが多い。「すべて」「全部」は制限なしに指示されたものの全部の量を表すが、「全員」「全校」「全類」などのような「全+意味的類別詞に相当する要素」の数量詞も全称数量詞と見做される。「全員」は人間にしか使えない。「全学」「全校」は学校に限定され、「全額」はお金に限定される。いわゆる、「意味的に類別詞に相当する要素」の性質により、使用範囲が制限されるということである。

「半+意味的類別詞に相当する要素」は生産性が低く、BCCWJから検索してみると、「半額」「半数」のみ使用頻度が高い。また、「半」というのは、形態論的に接頭辞としても正確に50%を表すわけではないと考える。「半」は単独として、自立性を持っておらず、付随形態素により、「半+付随形態素」として存在する。例えば、経験不足のため、まだ「一人前」とは認められない人材を表す言葉に、「半人前」というものがある。「半人前」は、別に正確に50%とは限らないのであり、80%、90%くらいを指し示している。そのほかには「デミグラス」「ハーフボトル」

³ 以降は「多寡を表す数量詞」と記する。

などもある。

(25) #太郎はパンを {すべて/半分/ほとんど} 食べた。

(25) は数量詞が指示する名詞句「パン」の前に、修飾・限定するものが何も存在しない例である。「パン」は何のパンであるか、明確でないと、構文の意味が確定しにくく、成立もしにくいと思われる。例えば、太郎が食べたパンには、「家にあるパン」「昨日買っておいいたパン」などのような様々な特定の解釈があるわけである。また、普通は、人間がパンをすべて・ほとんど・半分食べた場合には、人によっては個人差があり、パンを何個ぐらい食べるか想定すると、世界知識により普通の人間は20個、30個では食べられないわけである。名詞句「パン」は特定の解釈を受けており、文脈を再解釈することにより、数量詞構文が成立することが可能である。(25)の文脈の不足している部分を埋めることができれば、構文が成立する可能になると思われる。

(26) 太郎は昨日パンを3つ買っておいいた。今日はパンを {すべて/半分/ほとんど} 食べた。

「すべて」「半分」は、文脈上で「太郎は昨日パンを3つ買っておいいた」という前方照応の成立により、その指示する具体的な量が計算できる。「すべて食べた」というと、「3つ食べた」になる。「半分食べた」というと、「1.5個のパンを食べた」になる。「ほとんど」は、その指示する名詞句が特定数量詞を含む場合でも、「すべて/半分」と比べると、数量情報が不明確で曖昧である。

4.2 大まかな数量を表す数量詞

本節では、不特定数量詞の中に、特に多寡に関する判断を含まず、数量を特定しないで大まかな数量を表す数量詞を扱う。このタイプの数量詞は、「30人くらい」「50匹程度」「200グラムほど」「おおよそ200匹」「数人」「何人か」などがある。観察してみると、成員間の種類の異なると考えられる。

(27) 「特定数量詞の前、後+概数化できるもの」：30人くらい、20匹ほど、50冊ばかり、お（お）よそ200枚、大体50回…

(28) 「数+類別詞」：2、3個、数人、十数個…

(29) 「疑問詞+類別詞+か」：何人か、いくつ…

以上の数量詞は、いずれも類別詞が含まれるという共通性を持っている。類別詞を含んでも、数量情報が曖昧で不明確であるので、不特定数量詞に当たると考えることができる。

(27)は「くらい」「ばかり」「ほど」「お(お)よそ」のようなものを伴うことにより、数量が概数化になる。特定数量詞は数詞と類別詞からなるので、「数詞+類別詞」に相当できる。この「数詞」の利用は無制限ではないと考えられる。数詞は1桁の場合に、現場において一瞬で見てその数量がすぐわかるようなものには、概数化の機能を持っているものをつけられない。数詞は2桁以上の場合に、キリが良い、目立つ数詞を選択しなければならない。例えば、「34人くらい」は不適格である。

また、このタイプの数量詞をBCCWJから検索すると、「約+特定数量詞」と「お(お)よそ+特定数量詞」は公式な書類と発表などで出現している場合に圧倒的に多い。公式の場面で発表される情報に関しては、数字をはっきり明言すると、何らかの問題が発生した際に、責任が生じる場合があると思われる。もし、数量情報が細かくなると、情報自体の正確性のほうに、関心が集まりやすく、聞き手や読者からその断言の根拠の提示を求められる場合がある。このような配慮する可能性があるため、概数化の数量表現に対する需要が高まっている。

(28)の「数人」「十数人」のように、「数」と類別詞の合成によるものは、加藤(2003)により、数量に一定の幅を持っていると指摘した。(20)は「数+類別詞」と呼ばれているが、「十数+類別詞」の形式もある。「2, 3個」は二つの異なる基数詞が重なり、後で類別詞がついているという形であり、このタイプに分けられている。これらの数量詞は数量の限定度の推測に、数字の桁が関わると考えられる。「数人」や「十数人」の場合だと、どれくらい範囲の数を指し示すのかを、日本語母語話者に聞いてみると、やはり、「数人」は、2, 3人くらいであり、幅を広げれば、多くても「2人から9人まで」という2桁を超えない幅を想定できる。「十数人」の場合には「10人から19人まで」の幅である。「数十人」の場合に、「20人から100人を超えない」幅を持っている。「数百人」「数千人」なども同じように類推し想定することができる。

(29)の「何人か」「いくつか」における「何」は疑問詞、「いくつ」が疑問詞に相当する形態素である。「疑問詞+類別詞」の後ろに「か」がついた形式で大まかな数量を表す数量詞の一種と見ることができる。しかし、後ろの「か」を抜くと、通常の数詞のような振舞をしておらず、単なる「疑問詞」になるわけである。「か」がつくと、普通の平叙文になる。また、「類別詞」により、このタイプは生産性を持っていると考えられる。例えば、「何冊か」「何枚か」のほか、「何会場か」「何駅か」などもある。「何」という疑問詞以外はその生産性をもっていない。さらに、このタイプの「何」は必ず「なん」と読まなければならないと考えられる。「何」の読み方により、意味が違うということである。例えば、「なん駅ですか」の答えは「3駅」で、「なに駅ですか」の答えは「札幌駅」である。

よって、本節では「大まかな数量を表す数量詞」を「特定数量詞の前、後+概数化できもの」

「数+類別詞」、「疑問詞+類別詞+か」という3種類に分けている。

4.3 多寡を表す数量詞

日本語では、数量の多寡を表す数量詞が複雑である。「多寡」に対する判断について、実は個人差により、数量の多さに対する認知が異なるので、ここにおける「多寡を表す数量詞」とは、発話者にとってその量が多いか少ないかの主観的な判断を表すものである。主に「かなり」「たくさん」「大勢」「相当」「ずいぶん」「いっぱい」「多数/少数」「大量/少量」「多く」「数多く」「すこし」「わずか」「ちょっと」「たっぷり」などがある。

これらの数量詞を観察すると、「かなり」「相当」「ずいぶん」のような数量詞は強い副詞性を持っているが、連体数量詞としても使える。益岡・田窪（1992）において、これらの数量詞は主に「名詞」と「副詞」の章で記述されている。「名詞」としては、数量を表す名詞を「数量名詞」と呼び、意味の上から、数量の多さを表すものには「大勢、多く、多数、少数」などがあると述べている。「副詞」としては、副詞を「様態の副詞」「程度の副詞」「量の副詞」に分類する。「量の副詞」は「動きに関係するものや人の量を表す副詞」と定義し、「だいたい（ん）」「相当」「かなり」「すこし」などがあると述べている。また、「たくさん」「いっぱい」「かなり」「相当」などは、接続助詞「の」を介して名詞を修飾することができることと記述している。しかし、「ずいぶんの進歩」「相当な努力」「すこしのお金」のように確かに、連体修飾としては用いることが全くないわけではない。

「ずいぶん」「相当」のような数量詞は事前にある予想が存在し、予想より大きなずれが発生し、かなり上回っている場面で使えるが、「ずいぶん」「相当」は一般的に話者により、認識の度合いが変わってくることが多いので、主観が入るものと見做される。主観的な数量詞と言及すると、「数個」のようなものも主観が入っていると思われる。「数個」は世代、年齢により、指示する幅が違うのである。このような数量詞は人により、ばらつきが生じる可能性があり、簡単に決められないので、取り扱いにおいては難しいのである。

多寡の数量詞は様々な形を持っており、その品詞性は実際に使用しないと判断しにくいと思われる。例えば、「大量」「わずか」以外の数量詞は、名詞としても、副詞としても、形態上同じである。「大量」と「わずか」は副詞であり、連用数量詞の場合に、「大量に」「わずかに」の「に」がつく必要がある。また、副詞性を強く持っている数量詞は「かなり」「相当」「ずいぶん」は連用数量詞とする際に、動作量を広く解釈でき、語彙のみと、物事に関しては普通の程度・予測される常識的な程度をはるかに超えている様を表すので、価値判断や、評価を示すことができる。ただし、この判断や評価は主観的で、かつ文脈的な影響を受けると考えられる。

5. おわりに

本稿では、日本語の数量詞の様々な形を網羅的に整理し、以下のように分類を試した。

表1

日本語の数量詞	特定数量詞	3人, 8冊, 5杯…		
	不特定数量詞	語彙的比率数量詞	すべて, 全部, 全員…	
			半分, 半額…	
			一部, ほとんど, 大部分…	
	不特定数量詞	大まかな数量を表す数量詞	「特定数量詞の前, 後+概数化できもの」	30人くらい, 20匹ほど, 50冊ばかり, お(お)よそ200枚, 約30人…
			「数+類別詞」	数人, 十数個…
			「疑問詞+類別詞+か」	何(なん)枚か, 何(なん)人か, いくつか…
不特定数量詞	多寡を表す数量詞	「ずいぶん」「かなり」「多く」「大勢」「たくさん」「相当」「大量」「わずか」「少量」「多数」「少数」…		

本稿は、主に数量詞を「特定数量詞」と「不特定数量詞」に2種類に分けて展開してきた。特定数量詞に関しては、類別詞の種類や脱落の現象を説明した。また、変化を表す動詞の数量詞構文の意味特性を検討し、この場合の連用数量詞は動作の「差」と解釈され、連用数量詞の後ろに「に」をつけると、動作の「達成量」を表すと主張した。不特定数量詞を形態と意味の基準で、「語彙的比率数量詞」、「大まかな数量を表す数量詞」、「数量多寡の数量詞」という三つの下位分類を行い、それぞれの基本特性を分析した。分類の中身がまだ様々な点に展開する必要があるが、今回は数量詞の基本特性と分類にとどまると考える。

(だん けんしゅう・人文学専攻)

参考文献

- 赤楚治之 (2005) 「日本語における概数数量詞の Q-FLOAT」について 『日本語文法』 第5巻2号 pp. 57-73
- 井上和子 (1978) 『日本語の文法規則』 大修館書店
- 奥津敬一郎 (1969) 「数量的表現の文法」 『日本語教育』 14号 pp. 42-61 日本語教育学会
- 加賀信広 (1997) 「数量詞と部分否定」 『指示と照応と否定』 廣瀬幸生・加賀信広 pp. 91-178 研究社

段：日本語の数量詞の基本特性と分類

加藤重広（2003）『日本語修飾構造の語用論的研究』 ひつじ書房

加藤重広（2006）「日本語の数量詞文と動作量解釈」加藤重広・吉田浩美『言語研究の射程』 pp. 23-42
ひつじ書房

益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法—改定版—』 くろしお出版

『現代日本語書き言葉コーパス BCCWJ』（<https://www.ninjal.ac.jp/database/type/corpora>）

『NLB NINJAL-LWP for BCCWJ』（<https://nlb.ninjal.ac.jp>）

